

自由再生におけるビデオ文脈依存効果

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2016-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森井, 康幸 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009594

(課程博士・様式7) (Doctoral qualification by coursework, Form 7)

学 位 論 文 要 旨

Abstract of Doctoral Thesis

専 攻 : 情報科学専攻

氏 名 : 森井 康幸

Course :

Name :

論文題目 : 自由再生におけるビデオ文脈依存効果

Title of Thesis :

論文要旨 :

Abstract :

本論文は、人間の認知的情報処理の 1 つである記憶に及ぼす偶発的環境情報の効果の研究に位置づけられる。我々が認知的な情報処理を行っているとき、あるいは何らかの経験をしているときに、情報処理の中心となるのが焦点情報だが、それとは別の様々な情報(文脈)も同時に処理を受け、後の行動に影響を及ぼす。情報処理時に偶発的に存在していた環境情報を環境的文脈という。学習時に符号化対象と同時に存在していた環境的文脈が、想起の際にも存在した場合に、存在しなかった場合よりも想起が促進される現象が確認されており、この現象は環境的文脈依存効果と呼ばれている。

本論文では、第 1 章で記憶や文脈の概念・分類について、第 2 章において環境的文脈研究について概括した。その中で、近年増加しているコンピュータ画面で環境的文脈を操作する研究の特徴等について触れるとともに、本研究のテーマであるビデオ文脈の非常に大きな文脈依存効果を報告した研究を紹介した。続く第 3 章、第 4 章、第 5 章では、ビデオ文脈依存効果の特徴、生起機序等について実験的に検討した。

実験的検討

第 3 章 実験的検討 1 : ビデオ文脈依存効果の大きさへの疑問

実験 1 において、ビデオ文脈を視覚情報、動的情報、聴覚的情報の加わった複合文脈としてとらえ、どの構成要素がビデオ文脈依存効果に寄与しているのかを、短期大学生 60 名を対象に検討しようとした。Smith & Manzano (2010)の手続きに若干の修正を加えて、文脈の異同要因を実験参加者内の要因として実験した結果、文脈の異同の主効果のみ有意で、期待された交互作用は得られず、いずれのビデオの構成要素条件においても大きな文脈依存効果が得られた。この結果をもとに検討した結果、Smith & Manzano (2010)の用いた手続きには、文脈依存効果を過大評価するような方法論上の問題、すなわち、実験参加者の再生反応の集計・分類方法、および反応抑制の可能性などの問題があることが考えられた。

第4章 実験的検討Ⅱ：ビデオ文脈依存効果の実際と生起メカニズム

実験2と実験3において、上記の問題点を改善しつつ、Smith & Manzano (2010)の結果が文脈依存効果の過大評価によるものか否か等について検討した。

まず実験2では、実験1と同様の手続きを用いて、大学生48名を対象に、ビデオ文脈と学習項目とを関連づける群と関連づけない群で、改めてビデオ文脈依存効果の大きさを検討した。ただし、再生反応の分類法を工夫し、何を手がかりにしているのか推測できるように改善した。その結果、関連づけなし群でも文脈依存効果が得られたが、その効果サイズはかなり低減した。

実験3では、大学生40名を対象に、文脈の異同の要因を実験参加者間で操作することにより、反応抑制等の問題を解消して検討した。その結果、実験参加者間の比較においても文脈依存効果が確認された。

実験2と実験3より、Smith & Manzano (2010)が初めて報告した非常に大きなビデオ文脈依存効果は、彼らの用いた実験手続きにより、かなり過大評価されたものであることが示された。さらに詳細な分析から、ビデオ文脈依存効果の生起を特徴づけているのは、ビデオ文脈と学習項目との1対1連合であることが示された。

第5章 実験的検討Ⅲ：ビデオと静止画像の比較

実験1で見いだせなかったビデオと静止画像の文脈依存効果の違いを、改めて検討した。大学生15名を実験参加者として、文脈の異同と文脈の種類（ビデオと静止画）の2要因ともに実験参加者内で操作した。その結果、今回もビデオと静止画像間の文脈依存効果の生起に違いは見出せなかった。両刺激ともに、もともと文脈というよりも焦点情報となりやすいことが関係していると考えられた。

第6章 総合的考察

以上の4つの実験により、文脈の手がかり負荷が1の場合について、以下のことを見出した。(1) Smith & Manzano (2010)が報告した、ビデオ文脈依存効果の大きさは、彼らの用いた手続きによりかなり過大評価されていた。(2)学習項目とビデオ文脈の意図的な関連づけを行わなくても文脈依存効果は生じるが、その効果は著しく低下する。(3)ビデオ文脈依存効果は、実験参加者内操作でも、実験参加者間操作でも生じる。(4)ビデオ文脈依存効果の生起を特徴づけているのは、コンピュータ画面上に提示されるビデオ文脈と学習項目との間の1対1連合の形成である。(5)写真(静止画像)でもビデオと同程度に文脈依存効果が生じる可能性が高い。

本研究によって、ビデオ文脈依存効果は、ビデオと学習項目間の1対1連合を基盤にしていることが示されたが、このようなビデオ文脈の特徴がもたらすビデオ文脈依存効果研究の問題点と、今後の可能性について考察した。本研究は始まったばかりのビデオ文脈依存効果の生起機序に関する基礎的・実証的な知見を提供するものであるとともに、今後の発展的研究につなげるものである。